

平成州紙



おりおりの記

## 万世の桜

SMBC日興証券株式会社  
代表取締役会長

久保 哲也

今年もまた日本列島に桜の季節がやってきた。「ああ、日本に住んでいてよかったなあ!」とつくづく感じる。海外勤務が長かった私であるが、この時期だけは海外出張を避け、各地の桜の名所を訪れたいと思うようになってきた。

美しい花を愛でることは万国共通であろうが、日本人にとって桜は特別なものである。外国の方にも日本の花見は昨今大人気であるが、cherry blossomsという一単語ではとても日本人が桜に対して抱く特別な感情は言い表せないだろう。日本人にとって、桜の季節は新入生や新社会人の門出の時期と重なり、人生の大事な節目が思い出される季節である。校庭の桜の木の下で映した入学式の写真などがアルバムに残っている人も多いだろう。様々な出会いや別れ、“桜咲く”、“桜散る”の大学入試を思い出す人もいるだろう。余談だが、この季節になるとイルカさんの「なごり雪」や太田裕美さんの「木綿のハンカチーフ」の歌が私には懐かしい。

また、私には特別な桜がある。それは生まれ故郷である鹿児島県南さつま市の桜だ。南さつまは薩摩半島南端の自然豊かな田園地帯であり、卒業した万世（ばんせい）中学校は日本三大砂丘の一つである吹上浜の松林に囲まれた田舎の中学校で、近くには万世特攻基地があった。特攻基地といえば知覧飛行場がよく知られているが、知覧の西15km程にも万世飛行場という特攻基地があったことを知る人は少ないだろう。学校や旧特攻基

地周辺（現在は海浜公園となっている）に咲く見事な桜は今でも目に焼き付いている。200名ほどの若き特攻隊員が出撃した基地跡に咲く故郷の桜を見るた



びに、平和な時代のありがたさをしみじみと感じる。万世特攻平和祈念館に展示されている出撃前の若き隊員の笑顔の写真がいつまでも頭に残っているからだ。帰省するたびにこの一帯をドライブするが、南洋の空に散っていった青年たちのことを想うと恒久平和を願わずにはいられない。イザヤ・ベンダサンが言ったように日本人は水と安全はただだと思って、平和であることが当然のように過ごしている。しかし世界では、欧州に押し寄せる難民の悲劇や世界中で頻発するテロの問題がある。一日も早く彼らにも平穏な日が訪れることを願うばかりだ。

ここ数年、私は桜の季節は上野で開催される音楽祭に出かけるのが恒例となっている。今年も上野の満開の桜の中でコンサートを楽しみ、ほろ酔い気分で帰宅する時、一方では万世の桜を思い出さずにはいられないだろう。